

Title	はじめに 北欧語鳥類名称和名辞典
Author(s)	新谷, 俊裕
Citation	北欧語鳥類名称和名辞典ーデンマーク語ーノルウェー語 (Bokmål) ースウェーデン語ー. 2005, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71023
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

はじめに

本書は『デンマーク語－日本語辞典』編纂作業の延長上の産物である。デンマーク語の事物の日本語訳に誤訳が散見されることが気になった本書の編者は、かつて、「デンマーク語（スウェーデン語・ノルウェー語）の海水魚類名称の日本語訳 — いわゆる“マイナー”言語の辞書作りの困難；英和辞典，独和辞典と比較しながら —」（『大阪外国語大学論集』第24号，2001年3月：pp. 151-184）でデンマーク語の海水魚類名称の日本語訳を例として，誤訳が生まれるメカニズムを考察した。デンマーク語のような，いわゆる“マイナー”言語の辞典編纂は大抵，文系の編者数名によって行なわれるものであり，大英和辞典の編纂に見られるような自然科学者の支援は得られない。そこで英和辞典，独和辞典，仏和辞典などに頼ることになるが，この段階において誤訳が生じることが多いのである。英和大辞典ではさすがに正確な訳が得られることが多いが，英和中辞典，独和大辞典，独和中辞典，仏和辞典などは訳語にいい加減なものが多いし，また“マイナー”言語の編者自身がこれらの辞典の説明を読み誤ることも多いのである。そこで本書の編者は動植物の名称の訳語を求める場合には学名（ラテン語名）を基準に考える必要があるという，おそらく動物学者や植物学者にとってはごく当たり前のことを考えるに至ったのである。

この学名を基準にして訳語を求める方法を用いて本書の編者は「デンマーク語の鳥類名称の日本語訳」（『大阪外国語大学論集』第25号，2001年9月：pp. 159-188）の中で，デンマークで見られる鳥類を示した Hvass, Hans, Karl Aage Tinggaard & Henning Anthon. 1977. *Fugle i farver*. København: Politikens Forlag. が示す258種に，学名を手がかりとして，山階芳麿著『世界鳥類和名辞典』（1986年，東京：大学書林）を用いて標準和名（以降，和名と略す）を求めた。

次いで同様の方法で「スウェーデン語の鳥類名称の日本語訳」（『大阪外国語大学論集』第26号，2002年3月：pp. 185-214）の中で，Bruun, Bertel, Håkan Delin & Lars Svensson. 1989. *Alla Europas fåglar i färg. En fälthandbok*. Åttonde upplagan. Stockholm: Bonniers. を基に，上記の山階（1986）を参考にして，スウェーデンで見られる鳥類のスウェーデン語名称の日本語訳を求めた。この Bruun *et al.* (1989) は，その書名から分かるように，ヨーロッパ全体で見られる鳥類を扱ったもの

であるが、Bruun *et al.* (1989) の中に示されている各鳥類の分布図と説明から、スウェーデンで見られると思われる 265 種を本書の編者が選択したのである。

さらに、「ノルウェー語 (Bokmål) の鳥類名称の日本語訳」(『大阪外国語大学論集』第 32 号, 2006 年 1 月発行予定) の中で, Frislid, Ragnar & Benny Génsbøl. 2004. *Fugler i Norge*. Oslo: H. Aschehoug & Co. を基に, 山階 (1986) を参考にして, ノルウェー語 (Bokmål) の鳥類名称の日本語訳 (和名) を求めた。ただ, そこで扱った種名は, Frislid & Génsbøl (2004) に見られる 284 種に数種を加えた 306 種である。これは, デンマークで毎年定期的に観察されるのは約 300 種であるとする Meltofte, Hans & Jon Fjeldså (red.). 2002. *Fuglene i Danmark*. 2. udgave. Udgivet i samarbejde med Dansk Ornitologisk Forening. København: Gyldendal. を参考にしたのに加えて, たとえノルウェーでは非常に稀にしか観察されない種であっても, デンマークあるいはスウェーデンでは比較的良好に観察されるものも網羅するようにした結果である。なお Meltofte & Fjeldså (2002) に載っていないノルウェー語名称に関しては, 学名と英語名称を基に, 検索エンジンの Google を中心に, インターネットで調べた。

また, 鳥類の分類は近年, DNA 鑑定やコンピュータ技術を駆使した新しい分類が提唱されているようで (Meltofte & Fjeldså 2002: 40), Frislid & Génsbøl (2004) や Meltofte & Fjeldså (2002) にもその一部が反映されている。したがって上記拙稿でも分類に関しては主に山階 (1986) に従うものの, これに固執することなく, Frislid & Génsbøl (2004) や Meltofte & Fjeldså (2002) の分類, さらには, インターネット上のフリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』をはじめ, 多数のホームページを参考にした分類, とくに科の分類を示した。

本書は, 上記「デンマーク語の鳥類名称の日本語訳」と「スウェーデン語の鳥類名称の日本語訳」を「ノルウェー語 (Bokmål) の鳥類名称の日本語訳」に合わせて, 扱う種数を 306 種に増やし改訂増補したものと, このノルウェー語版とを織り交ぜてひとつにすることにより, デンマーク語名称とノルウェー語名称とスウェーデン語名称との間の共通点と違いが容易に概観できるようにしたものである。東西南北に長く伸びるスカンジナビア半島およびデンマークの地理を頭に浮かべると, ある種名ではデンマーク語とノルウェー語が共通の名称を用い, ある種名ではノルウェー語とスウェーデン語が, またある種名

ではデンマーク語とスウェーデン語が共通の名称を用いているのも理解できるような気がしてくるのは本書の編者の単なる錯覚であろうか。

なお最後に言及すべきこととして、全世界の鳥類を扱っている山階（1986）も、種の段階までしか示しておらず、亜種までは示していないということがある。例えば、日本、朝鮮半島、中国北部、沿海州に分布するコウノトリもヨーロッパ、北アフリカで繁殖するコウノトリも、種としてはコウノトリであり、山階（1986）では両者ともにコウノトリとして示されているのみである。しかし、亜種の段階まで見ると、前者はコウノトリ *Ciconia ciconia boyciana* であり、後者はシュバシコウ *Ciconia ciconia ciconia* である（『電子ブック版 日本大百科全書』. 1996. 東京：小学館. による）。また、例えばスウェーデン語の *gulärta* は学名を *Motacilla flava* といい、和名はツメナガセキレイである。しかし、Brunn *et al.* (1989: 206) によると、*Motacilla flava* には *Motacilla flava flava*, *Motacilla f. thunbergi*, *Motacilla f. flavissima*, *Motacilla f. iberiae*, *Motacilla f. cinereocappila*, *Motacilla f. feldegg*, *Motacilla f. beema*, *Motacilla f. lutea* という8つの亜種がある。スウェーデンで見られる *gulärta* は *Motacilla flava flava* であろうが、和名は何になるのか分からない。同様にデンマーク、ノルウェー、スウェーデンで見られる鳥類の、亜種レベルまでの分類による和名は分からないので、デンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語で *hvid stork/ stork* (D); *stork* (N); *vit stork* (S) というヨーロッパで見られるコウノトリ *Ciconia ciconia ciconia* もシュバシコウとはせず、コウノトリという和名を付すにとどめた。

また、亜種との関連で、本書の編者は「ノルウェー語 (Bokmål) の鳥類名称の日本語訳」および本書の中で一つのあたらしい和名を提案した。これは、かつてはベニヒワ *Carduelis flammea* の亜種 *Carduelis flammea cabaret* と考えられていた *lille gråsisken* (D); *brunsisik* (N); *brunsiska* (S) (lesser redpoll) が現在では一つの独立した種 *Carduelis cabaret* とみなされているのにもかかわらず、和名が見当たらないようなので、鳥類学者でもない本書の編者が敢えてヒメベニヒワという和名を提案した次第である（命名の背景について詳しくは p. 40 の注 (1) を参照のこと）。この点に関しては、今後、鳥類学の専門家の方がより適切な和名を考えられた場合には、そちらの方に修正したいと考えている。

なお本書は様々な用途を考慮して次の5つのリストから構成されている：

- I. 北欧語（デンマーク語・ノルウェー語 (Bokmål)・スウェーデン語）の鳥類名称の日本語訳（標準和名） — 目・科・属別分類による —
- II. 北欧語（デンマーク語・ノルウェー語 (Bokmål)・スウェーデン語）の鳥類名称の日本語訳（標準和名） — アルファベット順 —
- III. 和名（日本語） — デンマーク語；ノルウェー語 (Bokmål)；スウェーデン語
- IV. 学名（ラテン語） — デンマーク語；ノルウェー語 (Bokmål)；スウェーデン語
- V. 英語 — デンマーク語；ノルウェー語 (Bokmål)；スウェーデン語

2005年10月

新谷 俊裕